

## 第 11 章

### 高校生の地域への住み心地に影響する要因について

データサイエンス学部 山下尚也

#### 1. 問題の所在

現代の日本の全国的な問題として、地方から都市部への人口流出が挙げられ、それに伴う国内の地域格差が深刻化している。このような人口流出の要因として、経済環境や雇用環境が指摘されている中（総務省 2015）、若者の人口流出に着目すると、大学進学時に地方を離れることが原因とされている。実際に日本の 11 地域（北海道、東北、北関東、南関東、甲信越、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄）ごとの大学進学時の地元残留率を算出した調査によると、北関東(24.6%)、甲信越、四国(28.3%)と、地方地域が下位に並ぶ結果となった（リクルート 2022）。このことから、地方では高校生の半数以上が、大学進学のために地元を離れる選択をしていることが分かる。

このような地方の人材流出が問題視されている中で、政府は UIJ ターンという地方回帰行動の促進を対策している。UIJ ターンとは U ターン、I ターン、J ターンのことで、U ターンとは、地方から都市部に移住した人が再び故郷に戻ること、I ターンとは、都市部出身者が地方に移住すること、J ターンとは、地方から都市部に移住した人が故郷に近い地方都市に戻ることの意味する。また、このような地方回帰行動には地域満足度が影響している（海野ら 2022）。

以上を踏まえ、本論文では、U ターンにとって重要な意識と考えられる地域満足度に着目し、どのような人が、地域満足度が高いのかを明らかにすることを目的とする。続く第 2 節では先行研究を整理し、本論文で分析する仮説を構築する。第 3 節では使用するデータと変数を説明、第 4 節で分析結果を報告する。最後に分析結果から考察を行う。

#### 2. 先行研究と仮説の検討

##### 2-1. 先行研究の整理

地域満足度に関する研究は国内外で広く扱われており、特に地域環境要因と地域満足度の関係に関する実証研究が多く蓄積されているが（原田・杉澤 2015）、今回はその中から宗(2020)のものを取り上げる。宗はまず、地域満足度に関するアンケート調査を行い、その結果から因子分析を行なった。得られた因子を用いて人口増減率との重回帰分析を行なっている。その結果、「生活利便性因子」が有意となり、人口増減に影響を与えていることが明らかになった。

##### 2-2. 仮説の検討

先行研究を参考に、本研究では「地域の生活利便性が高いと考えている人ほど、地域満足度が高い」という仮説を検証する。先行研究との違いとして、先行研究では全年齢を研究対象としていたため、本研究では高校生を研究対象として行い、大人と高校生の思考の違いを見ようと思う。

### 3. データと使用する変数

#### 3-1. 使用するデータ

使用するデータには、「長浜市中高生調査（こども若者実態調査）」のアンケートデータを使う。調査の概要を表1に示す。

表1. 調査概要

|         |  |
|---------|--|
| 調査名     | 長浜市中高生調査（こども若者実態調査）                      |
| 調査対象    | 長浜市内の公立高校                                |
| 調査時期    | 令和5年7月20日～9月11日                          |
| 調査方法    | インターネット調査（生徒に調査依頼および回答先のQRコード付き案内チラシを配付） |
| 抽出方法    | 全数調査                                     |
| サンプルサイズ | 900                                      |

※調査の詳細は第1章に記載

#### 3-2. 使用する変数

目的変数には、「長浜市の住み心地満足度」を使用する。本調査では長浜市の住み心地に関してどの程度満足しているかを質問している。回答時の選択肢は「満足」「どちらかと言えば満足」「どちらとも言えない」「どちらかといえば不満」「不満」であった。分析の際には「満足」「どちらかと言えば満足」を『1. 満足』、それ以外を『0. 不満』の変数に変換して使用した。

説明変数には、「長浜市の生活利便性の満足度」を使用する。本調査では長浜市の生活利便性について、「若者向けの飲食店やカフェの数」「若者向けの服屋の数」「都会への行きやすさ」の3つの質問を行っており、回答時の選択肢は目的変数のものと同様である。分析の際は目的変数と同様に変数変換を行なった。

最後に統制変数として、「男性ダミー」「学年」「居住年数」「居住地域」の4つの変数を使用する。これらの変数は目的変数と説明変数のそれぞれの共通要因と考えられるため、これらの影響を統制するために分析に入れる。「男性ダミー」は、「男性」を1、それ以外を0とするダミー変数である。「学年」は、1年生を1、2年生を2、3年生を3のように変数を作成した。「居住年数」は、量的変数として用いた。「居住地域」は、長浜市内にある9つの地域を用いたカテゴリ変数を作成し、分析では9つの中で最も人口の多い「長浜地域」を参照カテゴリとして用いた。

表2に、使用する変数の記述統計量を示す。この表によると、目的変数である「長浜市の住み心地満足度」に関しては、満足している人の方が多いことが分かる一方で、説明変数の「長浜市の生活利便性の満足度」に関しては、不満な人の方が多いことが分かる。統制変数を見ると、「学年」に関して、1年生の回答数が多く、学年が上がるにつれて、回答した生徒が少なくなっている。また、「居住地域」を見ると、半数以上が「長浜地域」に住んでいることが分かる。

欠損値のある回答を除外した結果、最終的に718名のデータを使用して分析を行なった。

表2. 目的変数、説明変数の記述統計量

| 変数          | 割合   | 変数    | 割合   | 平均   | 標準偏差 |
|-------------|------|-------|------|------|------|
| 目的変数        |      | 統制変数  |      |      |      |
| 住み心地満足度     |      | 男性ダミー |      |      |      |
| 満足          | 77.6 | 男性    | 44.3 |      |      |
| 不満          | 22.4 | その他   | 55.7 |      |      |
| 説明変数        |      | 学年    |      |      |      |
| 飲食店満足度      |      | 1年生   | 52.4 |      |      |
| 満足          | 33.1 | 2年生   | 33.3 |      |      |
| 不満          | 66.9 | 3年生   | 14.3 |      |      |
| 服屋満足度       |      | 居住年数  |      | 15.0 | 3.1  |
| 満足          | 21.6 | 居住地域  |      |      |      |
| 不満          | 78.4 | 長浜    | 53.1 |      |      |
| 都会へのアクセス満足度 |      | びわ    | 6.1  |      |      |
| 満足          | 27.9 | 浅井    | 12.8 |      |      |
| 不満          | 72.1 | 虎姫    | 3.3  |      |      |
|             |      | 湖北    | 9.2  |      |      |
|             |      | 高月    | 7.5  |      |      |
|             |      | 木之元   | 4.3  |      |      |
|             |      | 余呉    | 1.0  |      |      |
|             |      | 西浅井   | 2.8  |      |      |

(n=718)

## 4. 分析

### 4-1. クロス表分析

まずは目的変数と説明変数の関係を見るために、一つずつクロス表分析を行った。分析結果を図1～3に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、すべて0.1%水準で有意であることが分かった。このことから、「生活利便性の満足度」と「住み心地満足度」は関連していることが分かる。

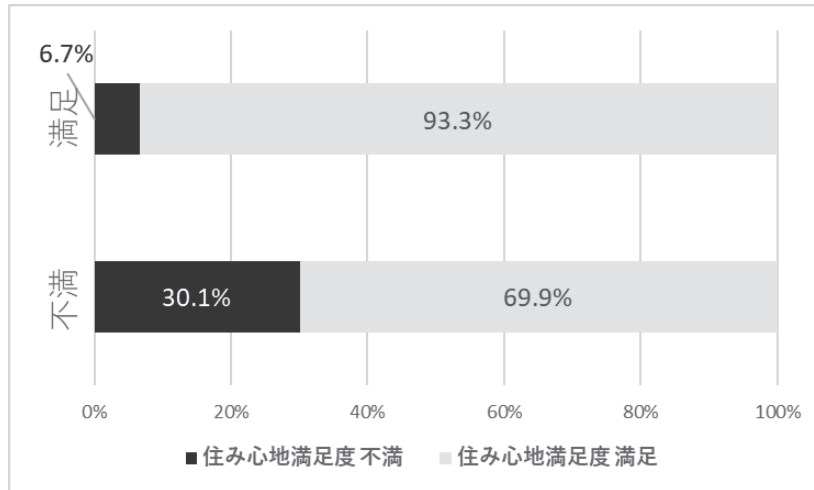


図 1. 飲食店満足度と住み心地満足度のクロス表分析

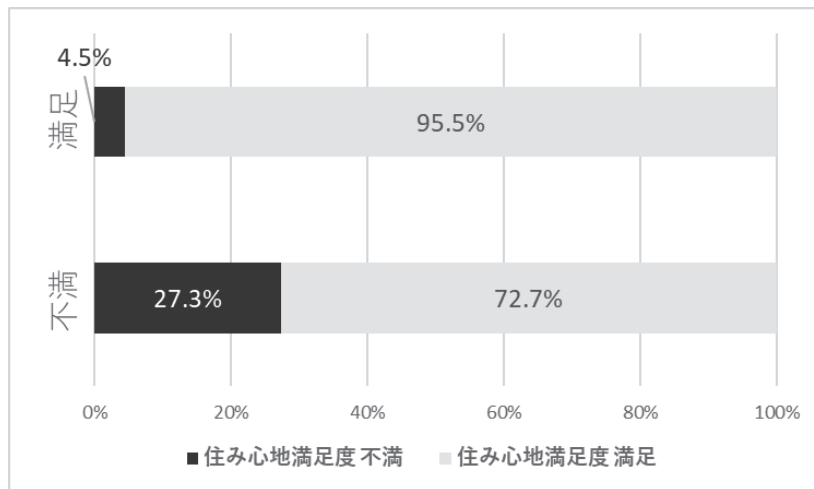


図 2. 服屋満足度と住み心地満足度のクロス表分析

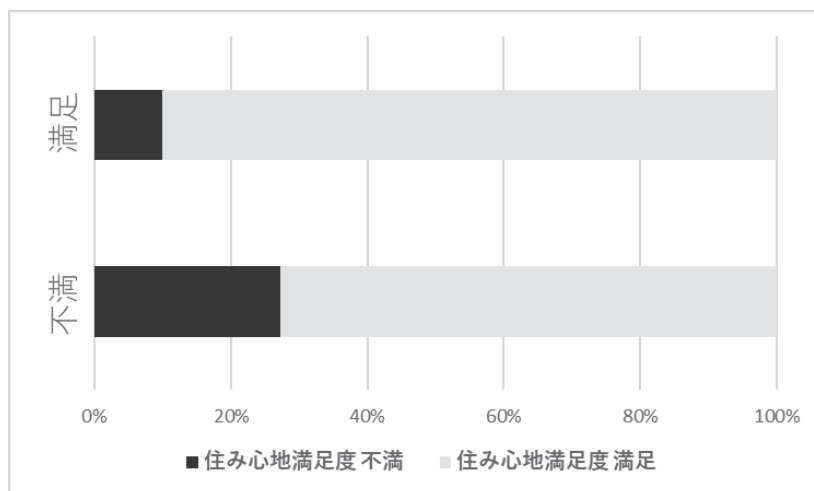


図 3. 都会へのアクセス満足度と住み心地満足度のクロス表分析

本項では、目的変数と説明変数の単純な関連を見るための集計であったため、次項ではより詳細な関連を見るために複数の要因を考慮した、ロジスティック回帰分析を行う。

#### 4-2. ロジスティック回帰分析

ロジスティック回帰分析の結果を表3に示す。分析結果から、「服屋満足度」「都会へのアクセス満足度」で1%有意、「飲食店満足度」で0.1%有意という結果が得られた。オッズ比を見てみると、「飲食店満足度」では3.2倍、「服屋満足度」では約3.9倍、「都会へのアクセス満足度」では約2.4倍と大きく影響を与えていることが分かる。また、統制変数の中では、「居住年数」で1%有意、「居住地域」の『西浅井地域』で5%有意という結果が得られた。

表3. ロジスティック回帰分析の結果

| 変数                 | B      | 有意確率 | 標準誤差  | Exp(B) |
|--------------------|--------|------|-------|--------|
| 定数                 | -0.229 |      | 0.497 | 0.795  |
| 説明変数               |        |      |       |        |
| <b>飲食店満足度</b>      | 1.163  | ***  | 0.299 | 3.200  |
| <b>服屋満足度</b>       | 1.349  | **   | 0.425 | 3.853  |
| <b>都会へのアクセス満足度</b> | 0.869  | **   | 0.275 | 2.384  |
| 統制変数               |        |      |       |        |
| 男性ダミー              | -0.069 |      | 0.200 | 0.933  |
| 学年                 | -0.192 |      | 0.135 | 0.825  |
| <b>居住年数</b>        | 0.089  | **   | 0.030 | 1.093  |
| 居住地域               |        |      |       |        |
| 長浜地域 (参照)          |        |      |       |        |
| びわ地域               | 0.666  |      | 0.522 | 1.946  |
| 浅井地域               | 0.064  |      | 0.305 | 1.066  |
| 虎姫地域               | -0.933 |      | 0.495 | 0.393  |
| 湖北地域               | -0.464 |      | 0.317 | 0.629  |
| 高月地域               | 0.404  |      | 0.408 | 1.498  |
| 木之元地域              | -0.719 |      | 0.408 | 0.487  |
| 余呉地域               | -0.990 |      | 0.845 | 0.371  |
| <b>西浅井地域</b>       | -1.303 | *    | 0.529 | 0.795  |
| N                  | 718    |      |       |        |
| NagelkerkeR2       | 0.225  |      |       |        |

## 5. 考察

本稿では、どのような人が地域満足度が高いのかを明らかにすることを目的として検証を行ってきた。4 節 1 項でクロス表分析を用いた単純な関係を確認し、2 項でロジスティック回帰分析を用いた詳しい関連を確認した。その結果、今回検証した仮説である「地域の生活利便性が高いと考えている人ほど、地域満足度が高い」は支持される結果となった。

本稿で設定した説明変数の中で最も目的変数に影響を与えていると考えられるものが、「服屋満足度」である。まず、クロス集計の結果から、「服屋満足度」について「満足」と回答した生徒の中で、「住み心地満足度」が「不満」と回答した生徒は 4.5%と、他の説明変数と比較しても最も少ないことが分かった。さらに、ロジスティック回帰分析の結果から、「服屋満足度」のオッズ比が約 3.9 倍と、これも他の説明変数のオッズ比よりも大きい値となっていることが分かった。これらを踏まえて、高校生の「住み心地満足度」に影響を与える要因は、地域の「服屋満足度」だと言える。

ここで、第 2 項で取り上げた宗の先行研究との比較をすると、先行研究では「生活利便性」の中でも、『飲食店満足度』が最も「住み心地満足度」に影響を与えているという結果となっていたが、本研究では「服屋満足度」が最も影響を与えているという結果となった。このことから、大人と高校生の間では、地域の住み心地を決定する要因が異なるということが明らかになった。

最後に、本分析の課題を述べる。まず、本研究で使用したデータは偏りが見られ、特に「学年」については半数が「1 年生」の回答となっているため、適切な分析ができたとは言えない可能性がある。また、その他の課題として、統制変数の少なさも挙げられる。今回のアンケートでは十分な質問項目を得ることができなかつたため、更なる研究では、より詳細な回答結果が集まれば、違った結果になることも考えられる。

## 6. むすび

今回の調査では、地域の生活利便性に満足している人ほど、地域の住み心地に満足しているということが明らかになった。特に『服屋満足度』が最も影響を与えていることから、衣料品や雑貨等を扱う専門店の充実が、地域の「住み心地満足度」を向上させ、大学進学で都市部へ進学したのち、地元に戻ってくる生徒を増やすことができると考えられる。

## 参考文献

- 原田謙・杉澤秀博, 2015, 「居住満足度に関連する要因——地域環境に着目したマルチレベル分析」『理論と方法』30(1): 101-115.
- リクルート, 2022, 「【全国版】18 歳人口予測、大学・短大・専門学校進学率、地元残留率の動向 2022」, リクルート進学総研, (2024 年 2 月 7 日取得, [https://souken.shingakunet.com/research/pdf/2022\\_souken\\_report/2022\\_souken\\_](https://souken.shingakunet.com/research/pdf/2022_souken_report/2022_souken_)

report.pdf).

宗健, 2020, 「地域の居住満足度と人口増減の関係——住みこち調査データを用いた全国 987 自治体の人口増減の分析」『都市計画論文集』55(3):422-427.

総務省, 2015, 「平成 27 年度版 情報通信白書 | 人口流出の背景」, 総務省ホームページ, (2024 年 1 月 29 日取得, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc231120.html>).

海野遥香・増本太郎・寺部慎太郎・柳沼秀樹・田中皓介, 2022, 「若年層に着目した地域愛着・街のシンボルへの意識と UJ ターン行動の関連性」『都市計画論文集』57(3):1180-1185.